34 踏まれてタンポポ

川谷 拓三

僕の役者生活は、通行人から始まった。少年の頃から映画好きだった僕は、どうしても俳優になりたくて、中学を卒業するとすぐに京都の東映撮影所に入った。

だから最初の役柄がたとえ通行人であっても、当たり前といえば当たり前で、そのことには何の抵抗もなかった。けれども、人間関係には、ずいぶんと苦しんだ。

頑固で、ちょっとヒネくれ者で、その上、何をするにも動作がノロい僕は、何かにつけ先輩や上司からいびられた。まあ、今でいういじめられやすいタイプだったのだろう。そのたびに、何度〝辞めてやる！〟と心の中で叫んだことか。が、それでも結局僕を思いとどまらせたのは、いつか役者として一人前になりたい、その一念だけであったように思う。

そんなわけで、いつかはちゃんとした役者になれる、そう信じていた僕であったが、実は、そううまくはいかなかった。何年経っても回ってくる役は、相も変わらず通行人や死人の役ばかり。

〝ひょっとして、僕には役者としての才能がないのだろうか……〟

対人関係にさいなまれ、役者としての芽も出ない。その頃から僕の心は次第に荒んでいった。そしていつしか酒におぼれるようになっていった。

そんなある日、酔った勢いで飲み屋で暴れるという大変な失態を

演じてしまった。僕は事の重大さに呆然となった。しかも、そんな僕に投げかけられた演技係長の一言は、さらに追いうちをかけた。

「いいか、お前、家に帰ってよーく首を洗って待っていろ！」

〝ああ、何てバカなことをしてしまったんだ。これであんなに憧れていた役者の道も閉ざされる〟

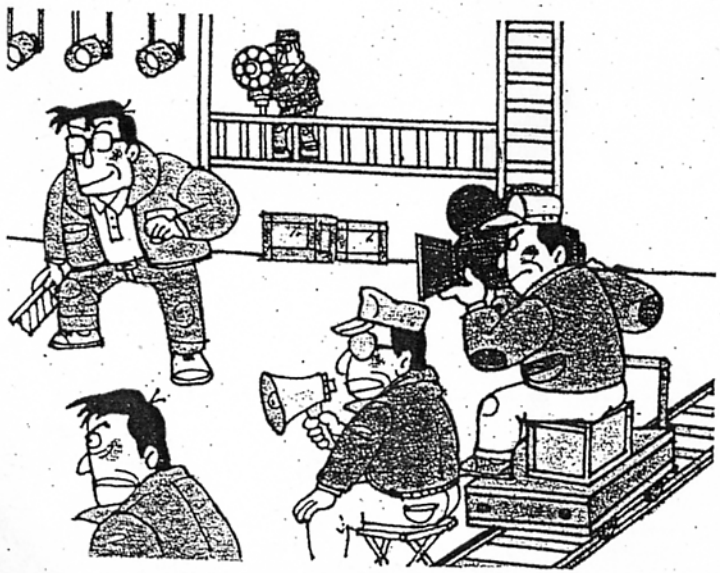
――僕は自分で自分を責めた。

しかし、幸いにも処分は謹慎二ヵ月。これで役者が続けられる。僕は助かったのだ。そして同時に思った。これを機会に、たとえどんな端役でも、たとえ通行人に過ぎなくても、その役になりきろう、と。それからの僕は、自分なりに役づくりに懸命になっていった。

そんな僕を、遠くからじっとながめる目があった。深作欣二監督である。

監督は、新しい作品『仁義なき戦い』の脇役に、僕を抜擢してくれたのだった。嬉しかった。深作監督は僕に役だけではなく、生きる自信といったものまでも与えてくれたように思えた。

僕は夢中でその役に取り組んだ。殴られ蹴られ、真剣に僕はその役になりきっていた。自分にこだわらずに自分自身を出すこと、それが自分にしか出せない味を出すことだと思



＊謹慎＝反省のために言動をつつしみ、人との接触をひかえること。

（留意点）
・失敗にもめげず、がんばり続けた筆者の姿に共感させる。

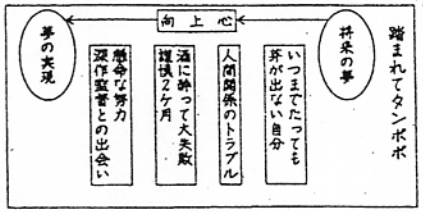
＊抜擢＝おおぜいの中からその人を選び、重要な役目につけること。

〈導入〉
・自分のよさや特技について話し合う。

〈展開〉
①川谷さんが役者として頑張れたのはなぜか。
②川谷さんの役者生活は順調だっただろうか。
③川谷さんが深作監督に抜擢されたのはなぜか。
④川谷さんの今も変わらぬ姿勢は、どうして生まれたのか。
⑤個性を生かして自分の夢を実現させるために必要なことは何だろう。

〈終末〉
・川谷さんの生き方を通して、自分の将来のことについて考えてみよう。

〈板書例〉



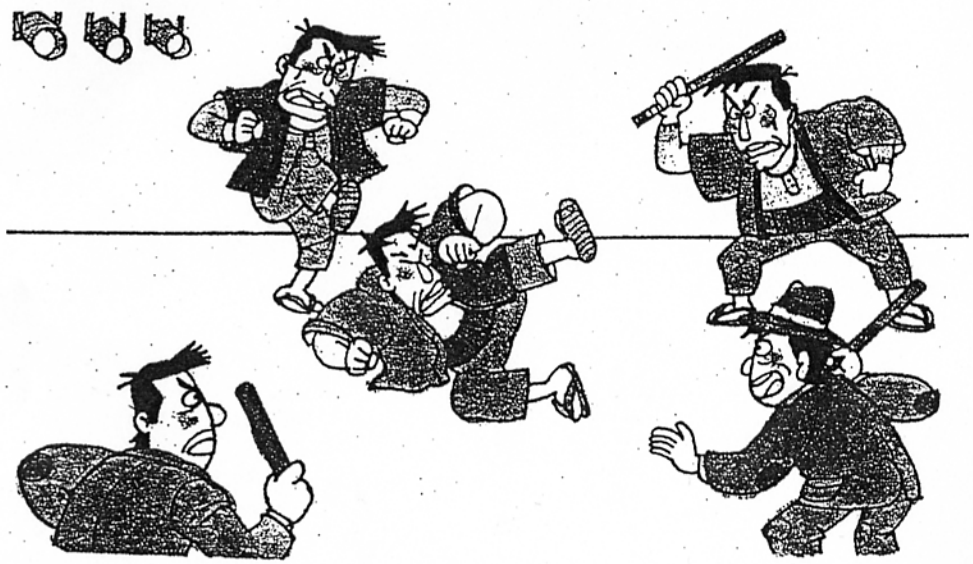
った。

封切りが近づき、『仁義なき戦い』のポスターが映画館に貼られた。何気なく眺めていた僕の目が、ポスターの一点に釘づけになった。有名な俳優の名前に並んで、〝川谷拓三〟の四文字がはっきりと印刷されていたのだ。

役者になって、生まれて初めてポスターに出た名前だった。僕は、その前に長い間たたずんでいた。

これ以後、僕はいろいろな役に恵まれ、マスコミにも名前を知られるようになっていった。

こうしてさまざまな役を演じるのに比例して、僕に役者としての自信がついていったかというと、今なお僕には自信なんてない。というより、むしろ僕は、自分の演技力に自信をもたないように気をつけてさえいる。これは、おそらく自分が未熟なためであろうけれど、とことん納得がゆくまで練習をし、役の人物に自分を作り上げて本番に臨まないと、とても不安なのだ。そして、どんな小さな役



でも、そこに自分の役者生命すべてを賭ける、決して器用とはいえない僕には、このようなやり方が一番合っているのじゃないかと思っている。

今、やっとここまできた僕の役者生活をふり返ってみると、ずいぶん長い道のりだったように思える。

役者という家業が、本当に好きだったから、どんな苦労にも耐えてこられたのだろう。踏まれても踏まれても諦めずにコツコツと努力していれば、必ず光は見えてくることを、僕はこれまでの人生の中で教えられた。

種田山頭火の歌の一つにこんなのがある。

「ふまれて　タンポポ
　ひらいて　タンポポ」

僕の生き方にも似て、今も大好きな歌だ。

（「PHP」昭和61年8月号による）

〈ここがだいじ〉
・川谷さんの生き方を通して、自分を生かすためにねばり強く努力することの大切さに気づかせたい。

〈自分との対話〉

1　二か月の謹慎処分を受けた川谷さんは、処分をどんな気持ちで受け止めたのだろう。

2　どんな小さな役でも、そこに役者生命すべてを賭けるという川谷さんは、どんな気持ちなのだろう。

『メッセージ』　わては無学やさかい、白なら白一色でいきま。ほかの色のことは考えまへん。（坂田三吉）

きみの場合は？　きみのやりたいこと、好きだということ、できることは、どんなことだろうか。また、きみは自分の個性について、どんな考えを持っているのか、考えてみよう。